

Donneと「墮落天使」としての Essex 伯

—— 諷刺詩を中心に ——

久 野 幸 子

1 序 論

Elizabeth女王(1533—1603)晩年の最後の寵臣であった Robert Devereux, Essex 伯 (1566—1601) は、当時の文人や劇場関係者にとって最も理解ある保護者の一人であった。数え切れない程の多くの本が彼に献呈され、献呈者の中には、Spenser, Chapman, Barnabe Barnes, Samuel Daniel, Michael Drayton, Francis Bacon 等が肩を並べ、一方 Southampton 伯を通じて、彼は Shakespeare とも個人的交友関係があったという。¹ この Essex 伯の文芸庇護の姿勢は、当代随一の廷臣であり、騎士道精神の最後の華々しい体现者でもあった彼にとって至極当然のことであった。何故なら、1561年に Thomas Hoby 卿が英訳し、以後広く愛読された Castiglione の『廷臣論』*The Courtier* (1528) にも見られる通り、詩歌の素養と文芸庇護は、理想的廷臣、又、ロマンスの騎士であるための必須条件の一つであったからである。²

しかし、若い頃は有名な諷刺詩人、恋愛詩人であり、後年は当時の最も優れた説教者の一人になった John Donne (1572—1631) は Essex 伯の庇護を受けたことは一度もなかった。願っていたこともあったらしいが、6歳年下の Donne が真に保護者を必要とした時 Essex 伯は既に権力の座からすべり落ちていたのである。Donne はついに Essex 伯の傍観者にとどまった。

にもかかわらず Essex 伯の短く劇的な生涯は、Donne の内面生活に少なからぬ影響を与えたと思われる。というのは、まず Donne 自身を考えてみると、彼は、父方の祖先が Wales の旧家出身者であり、母方には Thomas

More 卿, John Heywood との血縁関係があったとはいえ、現実には若死したロンドンの鉄商人の遺児でしかなかった。それでいて、青年期から中年期にかけて、宮廷での栄達を求めて二十年近くも獵官運動を繰り返している。しかも聖職叙任後は、James I の特別のご愛顧によって、宗教界におけるいわば寵臣となったからである。次に、現在までに明らかになっている伝記的事実から判断すると、ある時は義勇兵として、又ある時は Essex 伯の身柄を預かった国璽尚書の秘書として、Donne は Essex 伯が Cadiz 遠征の指揮をとった時から、女王への謀反直後処刑される時までの数年間の一部始終を、身近にあって注意深く見守ることの出来る、いや見守らずにはいられない立場にあったからである。

ところで Essex 伯は Elizabeth 朝社会にあって、どのような役割を果たしたのであろうか。Donne にとって Essex 伯とは一体何であったのか。Essex 事件は Donne にどのような影響を与えたのか。そしてそれは Donne の「宮廷観」とどのような関係にあったのか。そこで本論では、Donne が Essex 伯の遠征に加わった 1596 年の夏から、秘密結婚によって出世コースから脱落する 1601年12月頃までの数年間に焦点を絞り、Essex 伯の動向を軸に、当時書かれたと考えられる書簡詩、書簡、諷刺詩を比較、検討し、Donne の内面生活の変化を辿ってみたい。

2 Elizabeth 女王と Essex 伯

Robert Devereux は1566年 Elizabeth 女王の寵臣の一人であった Walter Devereux と Anne Boleyn の姪の娘である Lettice Knowles との間の第一子として生まれた。Elizabeth 女王が 33歳の時のことである。彼は 1577年 10歳で初めて宮廷に伺候したが、その時早くも女王に特別な関心を抱かせたらしい。父の死後、1578年母が、若き日の女王が一時真剣に結婚を考えたといわれる Leicester 伯と再婚したことで、彼はそのかつての寵臣の継嗣となった。そして 1587 年夏、彼は女王の心を完全に捉えることに成功したという。³ 時に Elizabeth 女王は54歳、片や Robert Devereux は20歳の若さ

溢れる美貌の青年貴族であった。

ところで、この独身、瘦身の老女王と、容姿端麗な貴公子との人目も憚らない親密な結び付きは、一見したところ、少々奇妙に思えるかもしれない。しかしながら、もし私達がいわゆる「宮廷恋愛」 courtly love があいかわらず異常な程持て囃され、しかも「エリザ崇拜」the cult of Elizabeth⁴ が広く宮廷と宮廷を取り巻く人口の間に浸透していた当時の社会によく精通しさえすれば、Essex 伯の女王への忠誠も、女王の伯への傾倒振りも、特に信じられないわけでもなくなろう。考えてみれば、この Elizabeth 朝は英国史上、最も光輝ある絶対主義宮廷文化の絶頂期にあたり、一人 Elizabeth 女王が宮廷の中心にあり、宮廷は政治の中心でもあった。全ての権能が女王に集中し、彼女は意のままに、爵位、称号、土地、金銀、利権等を贈与し、又剝奪することによって、当時1,000人いたとも1,500人いたともいわれる廷臣や「王の侍僕」のうちの重立った人々を完全に掌握していたという。⁵ とすれば、女王の君臨する宮廷で女王の意に叶い、側近となるのが、最も手短かで、最も確かな出世への最短コースであったのも無理からぬことであろう。そこで多くの廷臣達が寵臣になることによって重要な官職につこうと女王に媚び諂う。女王は女王で生来の優れた政治資質を発揮させて、一見気紛れな、しかし実は綿密な計算の上での言動によって、廷臣達を互いに牽制させつつ、巧みに彼らを操って政治を行なう。そして、45年間の在位中、まがりなりにも英国民に平和な生活を享受せしめたのである。

そこで、1587年の夏以降 Walter Raleigh 卿にかわって第一の寵臣の位置を獲得した Essex 伯には、数々の要職と利権とが与えられた。しかし、Essex 伯と女王との関係は極めて微妙で複雑なものであり、彼はたえず薄氷を踏む思いをさせられていた。これが女王の寵臣を扱う常套手段である。例えば、伯には女性の不実を嘆く美しい抒情詩があるが、⁶これは明らかに彼が女王の寵愛を自分のところへ引き付けておこうと作詩し、御前で歌わせたものらしい。⁷ 彼は宮廷詩人である必要もあったのである。だが伯が本当に寵愛を受けていた期間は意外と短く約3年後には早くもそれを失ったという。彼が二年前

に、Philip Sidney 卿の未亡人 Francis Walsingham と Sidney の遺志に従って結婚し、今彼女が身重であることが、政敵によって女王に暴露されたからである。以後1590年代前半、勘気は蒙っていないにせよ、伯はもはや第一の寵臣ではなかった。

しかし、Essex 伯の一般大衆の間で人気は大変なものであった。何故これ程までに人気があったのか。まず第一に、彼の家柄と育ちの良さ、洗練された身のこなし、それに冒険好きの若々しい気質が、多くの人々の心を強く捉えたりしい。第二に、これらの天賦の魅力に加えて、彼自身意識的に廷臣の理想像、^{かがみ}鑑として、又福音の実現に身を献げる愛国の士として振舞おうとしているところもあった。⁸ 尤も、生来、彼は、当世風廷臣達とは違って、人を騙したり、マキアヴェリ的な打算をもって行動出来ない、悪く言えば単純で自制心を欠く、良く言えば純粋で、一本気な性格の持主であったのだが。そこで 1596 年夏、Essex 伯を陸軍長官、Henry Howard 卿を海軍長官、Walter Raleigh 卿を海軍副官に Cadiz 遠征の勅が下った時、多くの若者が「義勇兵」volunteer として馳参じたのである。成程、16世紀後半不況の波が英国を襲ったこと、長子相続制度によって弾き出された地方のジェントリー階級の次、三男が職を得ようとあれこれ探し回っていたことなど、経済的、社会的状況も見逃せないだろう。⁹ だが、その数 300 といわれるこれらの義勇兵の多くの者は Essex 伯の行動に確かな共感を覚えていたに違いないのである。

3 Essex 伯と Donne

さて、当時 Lincoln 法学院の法学生であった Donne も義勇兵の一人としてこの Cadiz 遠征に加わり、6月に Plymouth 港を出航した。彼はこの出航に先立って、友人の紹介で Essex 伯に伺候したと言う。伯は30歳、彼は24歳、これが二人の最初の正式な出会いであった。

この Cadiz 遠征は、まあまあの成功を収め、民衆は Essex 伯の勝利に狂喜した。同年11月の感謝祭には聖パウロ大寺院の説教壇から、凱旋将軍として誉め称えられたというから、伯は「女王の寵臣」から「国民的英雄」になった

わけである。¹⁰

それから約8ヶ月後の1597年7月、Donneは再びEssex伯達の指揮下に行なわれたAzores諸島遠征に、今度は約400人の義勇兵中の一人として参戦している。しかし、この遠征は悪天候に災いされて不成功に終わった。やたら、軍費を多額に浪費しながら、何の見返りもないことが女王を怒らせ、以後彼女はEssex伯にますます冷たくなったと言う。

ところで、Donneがこれらの遠征の際、どのような資格で、どのような働きをしたのかについては、あまり正確にはわかっていない。(どうやらEssex伯指揮下の軍団で戦ってはいない模様である。¹¹)しかし、例の1635年版詩集につけられた肖像画の軍刀の柄を握った軍服姿からも窺われるようにDonneは当時の一般の平均的ジェントルマンにふさわしく、一応の軍事教育は受けていたと思われる。彼は職業作家で満足しえたBen JonsonやShakespeareとは違って、作品の出版は無論、写本の回覧にも余り乗り気でなかったように、SpenserやSidneyと同じく、あくまで宮廷での仕官を願う階層集団に属していたのである。

では、Donneがこれら二つの遠征に加わった動機は一体何であったか、又遠征の実態はどのようなものであったのか。これらの点を考察する時、まず思い出されるのが、1596年の始め、Donneが遠征に参加するかどうかを考えていた頃を書いたとされる‘His Picture’(「男の似姿」)と題するElegyである。ここには、遠征がどのように青年の若さと美と生気とを奪うのかが次のように描かれている。無論戦死する恐れも大いにあった。

When weather-beaten I come backe; my hand,
Perchance with rude oares torne, or Sun beams tann'd,
My face and brest of haircloth, and my head
With cares rash sodaine hoarinesse o'spread,
My body'a sack of bones, broken within,
And powders blew staines scatter'd on my skinne;¹²

このエレジーは「遊びの歌」であるが、遠征への参加には、それなりの覚悟

がいったことが十分窺えよう。航海が好きで、冒険に憧れていたにせよ、遊び半分という訳にはいかなかったのである。

続いて思い出されるのは、Donneが二度目の遠征中、親友の Christopher Brooke に宛てた「嵐」‘The Storme’、「風」‘The Calm’ と題する二通の叙景書簡詩である。これらは原稿のまま持ち帰られ、沢山の人の間で大いに回し読みされ、Donneの名を広めた。‘The Storme’ は 74 行、‘The Calme’ は 56 行から成り、共に「二行対句」couplet を用いた、ローマの詩人 Horace の書簡詩の伝統を復活させたもので、¹³ 旧約聖書的の比喻と、当時の出来事への言及とを巧みに織り交ぜつつ、Donne は身をもって体験した嵐の恐ろしさと、その後訪れた風の様子を、極めて生々しく再現することに成功している。例えば、‘The Storme’ からの次の引用にみられる、

Some coffin'd in their cabbins lye, 'equally
 Griev'd that they are not dead, and yet must dye;
 And as sin-burd'ned soules from graves will creepe,
 At the last day, some forth their cabbins peepe:
 And tremblingly'aske what newes, and doe heare so,
 Like jealous husbands, what they would not know.
 Some sitting on the hatches, would seeme there,
 With hideous gazing to feare away feare.¹⁴

(ll. 45-52)

「棺桶」「墓場」「最後の審判におののく罪深い魂」「嫉妬深い夫」等の風変わりだがユーモラスな比喻は、その比類ない描写力と共に、後の彼の傑作を十分予想させるものとなっている。

しかしながら、これらの書簡詩中、とりわけ私達を強く印象づけるのは、1967年に Donne の諷刺詩、エピグラム、書簡詩の本格的な本文校訂版を出した Milgate が“moralist”と呼ぶ、¹⁵ Donneの 道德意識、つまりたえず客観的に自己を見詰め、自己の identity を追求しようとする姿勢である。‘The Calme’ は当時の作品らしく、神に翻弄される人間の無力さを次のように述べ

て、詩の結びとしているが、

What are wee then? How little more alas
Is man now, then before he was? he was
Nothing; for us, wee are for nothing fit;
Chance, or our selves still disproportion it.

(ll. 51-54)

この境地に至る途中、Donne はふと思い出したように自らの参加の動機を冷静に分析してみせる。

Whether a rotten state, and hope of gaine,
Or to disuse mee from the queasie paine
Of being belov'd, and loving, or the thirst
Of hononr, or faire death, out pusht mee first,
I lose my end:

(ll. 39-43)

ここには常に自己をみつめる、そして今は自らがその行動の目的を見失っていることを淡々と語る Donne がいる。勿論、仮定の形で、彼の参加への動機が愛国心一つだけでなかったことがほのめかされてもいる。

とはいえ、Donne が義勇兵として参加したという事実は、彼が Essex 伯の遠征にたいして、少くとも肯定的であったことを証明していると思う。この頃の Donne も、同じ立場にあった多くの若者と同じく、Essex 伯の人柄にひかれ、忠誠心に満ちた騎士道の世界に強い憧憬の念を抱いていたのではないか。多くの学者の指摘を俟つまでもなく、'The Storme' 第二節冒頭の "England to whom we' owe, what we be, and have," (l. 9) は、Donne も確実に英国を愛していたことを物語っている。要するに、Essex 伯への同行は、Donne にとって出世の糸口を掴む為、戦利品の分け前に有付いて、遊興や通貨の切り替えで破産した財産を建て直す為、恋の駆け引きの煩わしさから逃れる為であり、又一方で愛国心に答え、華々しい名譽に向かって乗り出すことであったのである。

4 ‘Satire IV’

Donne には「諷刺詩」Satire と呼ばれる詩が5つある。‘Satire I’ はロンドンの上流社会, ‘Satire II’ は弁護士, ‘Satire III’ は宗教, ‘Satire V’ は裁判官を各々槍玉に上げている。これらに対し, 宮廷を非難, 攻撃の対象にしているのが ‘Satire IV’ で, 詩中に見られる “to the losse of Amyens” (l. 114) や “Guianaes rarities” (l. 22) 等当時世間をにぎわした話題への言及から, 一般に1597年3月から7月までの間, 即ち, Cadiz 遠征帰還後, Azores 諸島遠征に出陣するまでの間に, Donne が宮廷へ参内し, その体験をもとに執筆したものと考えられている。¹⁶ この ‘Satire IV’ はこの5つの詩中, 他の詩の約二倍の長さがあり, 内容的にも第一の傑作という評価を受けることが多い。何故なら, この「二行連句」形式, 244行からなる諷刺詩は, 先に引用した書簡詩と同様, Donne が意識的に Horace の *Satires* を模倣したもので, Donne の古典文学への造詣の深さを実証している。¹⁷ だが, 同時に Donne が模倣に出発しながら, 如何にして諷刺詩という文学形式を自家薬籠中のものとしたかを示してもいるわけで, 私達は現代にあって, ローマの諷刺詩の影響に気付きつつ, Elizabeth 女王晩年の乱れた宮廷生活をまるで戯画でも見ているようにこの詩から映像化できるからである。

さて, この詩の構成は, 話者 ‘I’ が二度, 宮廷に伺候し, 最初はそこで出会った一人の奇妙な宮廷人との馬鹿げた対話によって, 二度目は話者自身の感想という形で, 宮廷, 廷臣, 及び宮廷に出入する人々の悪徳と愚行とを, 次々と並べ立てていく, というものである。

宮廷生活においては, まず, きらびやかで一風変わった衣裳を誇示することが, 重要な仕事(?)の一つであった。というのは女王があれこれ考え出す流行に, 廷臣や侍女は我先にと見倣わなければならなかったからである。¹⁸

His cloths were strange, though coarse; and black, though bare;
Sleevelesse his jerkin was, and it had beene
Velvet, but 'twas now (so much ground was seene)

Become Tufftaffatie; and our children shall
 See it plaine Rashe awhile, then nought at all.¹⁹
 (ll. 29-34)

そこで、人々は女王に認められる為、あるいは虚栄心を満足させる為、土地を売ってまで、時には借金をしてまで、次の週には劇場へ売りにいくような衣裳を揃えて参内する。これでは、まるで宮廷が舞台で、廷臣が役者のようなものではないか。

and I, (God pardon mee.)
 As fresh, and sweet their Apparrells be, as bee
 The fields they sold to buy them; 'For a King
 Those hose are', cry the flatterers; And bring
 Them next weeke to the Theatre to sell;
 Wants reach all states; Me seemes they doe as well
 At stage, as court; All are players; who e'r looks
 (For themselves dare not goe) o'r Cheapside books,
 Shall finde their wardrops Inventory.
 (ll. 179-187)

又、宮廷人はうそやお追従の名人で、

yet I must be content
 With his tongue, in his tongue, call'd complement:
 In which he can win widdowes, and pay scores,
 Make men speake treason, cosen subtlest whores,
 Out-flatter favorites, or outlie either
 Jovius, or Surius, or both together.
 (ll. 43-48)

うわさ話や中傷が大好きで、話の質の違いのわからない彼らはどんなことでも話の種にしてしまう。

More than ten Hollensheads, or Halls, or Stowes,

Of triviall houshold trash he knowes; He knowes
 When the Queene frown'd, or smil'd, and he knowes what
 A subtle States-man may gather of that;
 He knowes who loves; whom; and who by poyson
 Hast to an Offices reversion;
 He knowes who'hath sold his land, and now doth beg
 A licence, old iron, bootes, shooes, and egge-
 shels to transport; Shortly boyes shall not play
 At span-counter, or blow-point, but they pay
 Toll to some Courtier;' And wiser then all us,
 He knowes what Ladie is not painted;

(11. 97—108)

このように宮廷では、諸々の要職や利権獲得の為、女王へは勿論、寵臣、高官への胡麻すり、賄賂が慣習化し、時には、望んでいる地位を手に入れる為には毒まで盛る有様であった。彼らの獵官運動は激烈を極め、それは最後の審判の日まで続くだろう。

He names a price for every office paid;
 He saith, our warres thrive ill, because delai'd;
 That offices are entail'd, and that there are
 Perpetuities of them, lasting as farre
 As the last day;

(11. 121—125)

武勇に秀いでた、立派な、一人前の男でさえ、“Queenes man”として宮廷に仕官することのみを願い、華美な宮廷生活にうつつを抜かしている。

Being among
 Those Askaparts, men big enough to throw
 Charing Crosse for a barre, men that doe know
 No token of worth, but 'Queenes man', and fine
 Living, barrells of beefe, flaggons of wine;

(11. 232—236)

以上、話者があばき出す宮廷の墮落の諸相のうちのいくつかを幾分恣意的に引用してみたが、これだけで十分、当時の宮廷の乱れた有様が推測できよう。

そこで、次にこの詩にもられた宮廷への諷刺と Donne の内面との関係を考えてみたい。私達はこの話者と Donne とを同一視することは出来ないが、Milgate が Donne の諷刺詩全般に渡って、

..... One cannot deny, however, that the *persona*, the voice speaking in the poems, is well controlled to persuade us of a genuine moral fervour in the speaker.²⁰

と解説するように、この詩においても、Donne 自身の真の道徳的情熱 “moral fervour” とでも呼ぶべきものが、あちこちに^{にじ}滲み出ているのは見過せない。

しかしながら、この詩において更に重要な点は、ここでの Donne の宮廷諷刺には、辛辣な嘲笑より、むしろ、機智と諧謔を自由に駆使する心の余裕、いかにすれば精神の柔軟性が感じられることであろう。これは何故か。この点については、次の二つのことが考えられよう。まず一つは、Donne が話者 ‘I’ を部外者でありながら、宮廷に伺候するだけで、自らも又宮廷生活の罪深さに染ったと考える人間に想定してある点である。例えば、話者は、冒頭の次の箇所をかわきりに、

Well; I may now receive, and die; My sinne
Indeed is great, but I have beene in
A Purgatorie, such as fear'd hell is
A recreation to' and scant map of this.

.....
Yet went to Court;

(ll. 1-8)

“(Guilty’ of my sin of going,)”(l. 12), “(God pardon mee.)”(l. 179), あるいは、

He names mee,’ and comes to mee; I whisper, ‘God!
How have I sinn’d, that thy wraths furious rod,

This fellow chuseth me?’

(ll. 49—51)

と何度もこの考えを繰り返している。勿論、これは、Donne が、そもそも外に向かうジャンルである諷刺詩を、彼らしく自己追求の、自省の色合いの濃いものにしていても言えるし、ひょっとすると彼はそういう振りをすることを楽しんでいるかもしれない。が、いずれにしても、ここには早くも宮廷内の一員たろうとする Donne の自覚が垣間見られるのではないか。法学院に在籍することで宮廷入りを待機する立場にあった Donne が、遠征への参加後、今や宮廷に初登場した。従って、この詩に見られる Donne の宮廷観は宮廷の墮落に気付きつつも、それだからといって、その存在を否定するようなものではないのである。

二つ目に考えられるのは、この詩には、諷刺詩人と比較するかたちで、説教者への言及がなされていることであろう。

Preachers which are
Seas of Wit and Arts, you can, then dare,
Drowne the sinnes of this place, for, for mee
Which am but a scarce brooke, it enough shall bee
To wash the staines away;

(ll. 237—241)

説教者は罪を清めること、世直しにかけては諷刺詩人より、海を小川と比べた位数倍も有能である、というこの比較は、Donne が諷刺詩人の限界をわきまえていることを明示している。つまり、ここには Donne の精神的ゆとりが感じられる。この意味で、Milgate の次の指摘は卓見であろう。

..... The humorous poise and the absence of hysteria are due in part, no doubt, to Donne's realization that however violently the satirist writes he cannot really correct vice and folly; it is the preachers, not the poets, who have the means of cleansing society.²¹

だが、しかし、この話者は、一方で、彼の力はどれ程小さくとも、その罪を祖先までさかのぼって自ら償おうともしているのである。

But since I am in,
I must pay mine, and my forefathers sinne
To the last farthing; Therefore to my power
Toughly' and stubbornly' I beare this crosse;...

(ll. 137–140)

結局この詩には、宮廷の墮落の現状を知り、非難し諷刺してはいるものの、一步下がって、ある心の余裕をもって、宮廷を肯定的に眺めている Donne の姿がおぼろげながら認められると思われる。

5 Essex 事件前後

Azores 諸島遠征のすぐ後、おそらく1597年11月か、1598年の始め、Donne は当時の国璽尚書 Thomas Egerton 卿の秘書に任命された。卿は 1597 年 10月に、後に Donne の妻となる Ann More の叔母の Elizabeth Wolly と再婚したばかりであった。Donne は遠征中、卿の長男や養子と親しくなり、彼等の推挙によって登用されたい。Donne は Essex 伯の被庇護者にはならなかったが、「王の侍僕」としての第一歩を踏み出した。現代でいえば、彼の立場は法務大臣の秘書のようなものであり、卿の邸となっていた Strand にある York 屋敷が Whitehall 宮殿（女王は晩年、5つあった宮殿の中でここに身を落ち着けることが多かったという²²⁾）に隣接していたこともあって、宮廷に出入する多くの高官や重臣達と親しく接する機会に恵まれたという。Egerton 卿秘書職の前任者の多くが後に法曹界、官界あるいは政界で各々目覚しい栄達を遂げていたので、Donne 自身も重臣への前途は洋々たるものと感じていたに違いない。

一方、Essex 伯と女王との関係は 1598年7月、重大な局面を迎えていた。Ireland 問題を論じていた重臣会議の席上、女王が Essex 伯の両頬を打ち、伯が刃の柄に手をかけたというのである。これは大変な不敬行為であったが、

直後女王は伯に対して明白な処罰は下していない。伯は自粛し自宅に蟄居した。

1598年9月、不死鳥の如く Essex 伯は再び宮廷に戻った。そして1599年3月、Cecil 親子を始め、多くの政敵達が強く反対を唱える中を、Essex 伯自らが総司令官に、Ireland 遠征が強行されることになった。これは根回し、裏工作などの策を弄することのできない伯が、事の弾みで火中の栗を拾ったようなものであった。Essex 伯は廷臣の鑑であったかもしれないが、典型ではなかったのである。にもかかわらず、Essex 伯とその一行、16,000 人の歩兵と1,300 人の騎兵、とは、民衆の熱狂的な声援のどよめく中を、ロンドンから出陣していったというから、伯はあいかわらず人気者であつたらしい。この遠征にも再び、Donne の多くの友人達が参加した。Egerton 卿の長男も Essex 伯の秘書の Henry Wotton も伯と一緒に Ireland へ進軍している。勿論 Donne は既に出世への有力な足場を得ていたのでロンドンに残ったが、国璽尚書の秘書という立場上、この重大な国家の総力を挙げての遠征に、極めて強い関心を払っていたことはいうまでもなからう。この時期に書かれた書簡にはその事実を示すものが二、三ある。

しかしながら、この Ireland 遠征は Essex 伯に致命的打撃を与えることになった。英国が古くから手を焼いていた、いわば「泥沼」の Ireland に進軍したものの、伯は、戦略上の失策を繰り返し、Cecil 達の計略で援軍が到着しないこともあって、反乱の鎮圧に失敗する。しかも、女王の命令を無視して、敵方の Tyrone 将軍と休戦会談を行ない、総司令官の権限を利用して、勝手に爵位者をおびただしく創り出し、戦局未決のまま女王のもとに舞い戻った。これら一連の軽率な行動は、女王の逆鱗にふれ、Essex 伯は宮廷から追放されるだけでなく、女王への叛逆者として一切の行動の自由を奪われる。1599年の9月末のことであった。丁度同じ頃、Donne は、Dublin 城で戦死した Egerton 卿の長男の葬儀が Cheter の大寺院で行われたのに参列し、死者の刃を掲げて葬列に加わっている。

1599年の10月から、1600年6月までの8ヶ月間、Essex 伯は Egerton 卿

の監督下におかれ、Donne も居住していた York 屋敷に軟禁された。尤も、1600年1月20日に Egerton 夫人が死に、同年10月21日、卿は再再婚をしている為、Donne がいつまで York 屋敷に住んでいたかは、はっきりしない。だが、少なくとも数ヶ月間は Donne には伯と身近に接する機会があったと推測できよう。

さて York 屋敷での Essex 伯は、人々の眼にどのように映っていたのであろうか。Bald が

..... His presence was a source of discomfort to the whole household since, though a prisoner, he had to receive the attention due to his rank.²³

と説明しているように、確かに伯の存在は、回りの者達にとって不愉快なものであったらしい。では、Donne にとってはどうだったのか。この点について、当時、Essex 伯の秘書を辞して宮廷を去り、田舎に引き籠っていた Henry Wotton に宛てたといわれる Donne の一通の書簡を基に、少々考えてみたい。

宮廷を追われ、失意の底にあった Essex は、女王が秘かに見舞った程の重病に罹ってもいた。しかしながら、そんな Essex を見守る Donne の眼は次のように意外と醒めているのである。

..... he withers still in his sicknes & plods on to his end in the same pace where y^o left vs. the worst accidents of sicknes are y^t he conspires wth it & y^t it is not here beleaved. that w^{ch} was sayd of Cato y^t his age vnderstood him not I feare may be averted of y^r lo: that he vnderstood not his age: for it is a naturall weaknes of innocency. That such men want lockes for themselues & keyse for others.²⁴

この頃の Donne は、伯への同情も感じないわけではなかったが、それ以上に深い失望を味わっていたらしい。Donne は伯に世間知らずで軟弱な一面が

あったことをはっきり見抜き、時代が彼を理解しなかったのではなく、彼が時代を理解できなかったのだと考えている。そして、今や伯は彼にとって、いわば「落ちた偶像」となり、この落胆と幻滅の気持が、この書簡中、次のように Essex 伯とその一党とを「墮落天使」と呼んでいるところに、極めて歴然とあらわされている。人々は Essex の失脚をおしんではないのだ。

..... of Essex & his trayne are no more mist here then
the Aungells w^{ch} were cast downe from heaven nor (for
anything I see) likelier to retourne.

ところが、身から出た錆とはいえ、Essex 伯の不運に対して、彼をここまで追い込んだ宮廷はどうか。まるで自らの病んでいることに気付いてはいないではないか。

..... The Court is not great but full of iollyty &
revells & playes and as merry as if it were not sick.

観劇や歓楽に明け暮れる宮廷には、その実、諸悪がび満し、古い悪のあとに、次々と新しい悪が生じている。

..... I gleane such vices as the greater men (whose barnes
are full) scatter yet I learne that y^e learnedst in vice
suffer some misery for when they haue reaped flattery or
any other fault long there comes some other new vice in
request wherein they are vnpracticed.

この宮廷への非難には、宮廷の女達への皮肉な中傷が続く。宮廷の悪徳は女達には感染しない。何故なら女達は元元最低の墮落状態にあるからである。

..... only y^e women are free from this charge for they
are sure they cannot bee worse nor more throwne downe then
they haue beene: they haue pchance heard that god will
hasten his iudgement for y^e righteous sake. & they

affect not that hast & therefore seeke to lengthen out
ye^e world by their wickednes.

Elegies や *Songs and Sonnets* にも多く見られる Donne の女性へのシニシズムがここでは、このように特に痛烈な表現になっているのは注目に価しよう。

これら宮廷や女性への皮肉で鋭い観察の眼は、当然廷臣にも向けられ、Donne は次のように、廷臣の現実の姿を頭におきつつ、宮廷内での自らの identity 追求を行なっている。

..... I am no Courtier for w^hout having liued there
desirously I cannot haue sin'd enough to haue deserv'd
that reprobate name: I may sometymes come thither &
bee no courtier as well as they may sometymes go to
chapell & yet are no christians.

ここには、宮廷へ出入りする必要上若干の罪は犯していることを自認しながらも、「自分は、廷臣の名に価する程の罪を犯してはいないから、廷臣ではない」と断言する、Donne の自尊心と、その自尊心に裏打ちされた疎外感とが明らかに示されている。つまり、'Satire IV' に窺われた Donne の宮廷、廷臣観と比べてみると、この書簡には、宮廷への不満が次第に募り、早くも少々宮廷離れ(?)しつつある彼の当時の心境の一端が暗示されている、とも考えられよう。とはいうものの、Donne は現実生活においては、女王の覚えめでありたい高官であった Egerton 卿の秘書の職を、水をえた魚の如く立派に勤めていたのだから、彼の宮廷観は、かなり屈折した複雑なものであったに違いないのだが。

1600年6月 Essex 伯は York 屋敷から自分の屋敷に移された。だが、7月5日伯の裁判が York 屋敷で執行され、審議が一度の休延もなしに11時間も続いたという。8月の終りから伯は一時的に自由を味わい、民衆の伯への同情は増大する一方であった。年が開けて1601年2月8日、ぶどう酒関税の請負

を取り消されて以来、もやもやしていた不満が爆発、伯は家の子郎党や不穏なやからと共に、Whitehall 宮殿に向かって兵を挙げた。しかし、女王側では早くからこの動きを察知しており、ロンドン市民の蜂起と伯の決断とのタイミングがあわなかったこともあって、兵 200 人たらずの伯一味はあっけなく惨敗、伯はロンドン塔に幽閉され、17日後の25日、斬首の刑を受ける。この時伯は34歳の若さであった。

ところで、この処刑に民衆は非常に憤り、政府は Essex 伯を弁護する出版物をその後数年間も禁書にしなければならない程であったという。²⁵ 女王自身も、英国を守る為に下したと信ずる伯の処刑決定を悔いることは決してなかったが、かつては寵臣であった伯の死そのものは、後々まで嘆き悲しんだらしい。それにしても、処刑の当日、宮内大臣一座によって、「王と寵臣との王位をめぐる確執を描いた」『リチャード二世』*Richard II* が Whitehall 宮殿の御前で演じられていたという歴史的事実は、仕組まれたものであったにしろ、実に興味深い。時に女王は崩御 2 年前、即ち、最晩年の68歳を迎えていた。

さて、結局、Essex 伯は Elizabeth 朝社会にとって一体何であったのか。もしあえて比喩的に言わせてもらえば、伯は女王を中心とした絢爛豪華な宮廷社会という pageant を盛り上げた立て役者の一人であった。しかし、中世騎士道の華でもあった伯の存在は、宮廷絶対政治が次第に近代的政治形態に移行しつつあった英国にとって、所詮徒花であり、この pageant は彼に scapegoat の役を演じさせることによってのみ幕を閉じ得たのではなかったかと思われる。伯は自分が女王にとって〈道具〉であり、一人の傍役であることに気付かず、〈男〉である廷臣の彼が、〈女〉である女王を支配できると思いがったところに悲劇の——彼にとっては——原因があったのである。

では、Donne はこの事件をどう考えたのであろうか。Essex 屋敷へ説得に向かった重臣団の一員であった Egerton 卿の秘書が、どのような行動をとったかは、十分予測出来る。しかし、その心境は以後執筆された作品を基に推測するしかないのである。

6 'The Progresse of the Soule'

Essex 伯処刑6ヶ月後の1601年の夏、Donneは諷刺詩(Poëma Satyri-con)「魂の巡歴」('The Progresse of the Soule')を執筆し始めたが、第1歌('The First Song')だけで筆を置いている。この52連、520行からなる詩には、8月16日という日付の入った書簡形態の序文とも言うべきものがつけられ、作者 Donne が何故、何を、どのような意図で書こうとしているのかを、知的に洗練された読者を想定しつつ、極めて大胆、かつ幾分大袈裟に語っている。まず、全体の構想は、

..... the Pithagorian doctrine doth not onely carry one soule from man to man, nor man to beast, but indifferently to plants also: and therefore you must not grudge to finde the same soule in an Emperour, in a Post-horse, and in a Mucheron, since no unreadinesse in the soule, but an indisposition in the organs workes this.²⁶

であり、Pythagorasの輪廻“metempsychosis”の理論に従って、〈魂〉が人や動物だけではなく、植物にも宿る過程の全てを描き出そうという野心的なものである。しかもこの〈魂〉は不滅であり(INFINITATI SACRUM)、宿るものによって、他の機能が働かなくなっても常に記憶する機能だけは損われないので、知恵の木のリンゴに宿った最初の時から、現在に至るまでのそれ自身の全行動と諸々の経験とを作者に語る事が出来るのだという。

さて、この詩の批評史をごく簡単に辿ってみると、まず同時代ではAndrew MarvellやBen Jonsonが着眼し、後者はDrummondに次のように解説しているが、

The conceit of Donne's Transformation or *Μετεμψύχωσις* was that he sought the soule of that apple which Eve pulled and thereafter made it the soule of a bitch, then a shee wolf, and so of a wrman; his generall purpose was to have brought

in all the bodies of the Hereticks from the soule of Cain,
and as last left it in the bodie of Calvin.²⁷

Donne が〈魂〉の遍歴をリングから女性にまで跡づけるところで詩を中断し、Cain に宿った〈魂〉が全ての異端者の肉体を通過した後、Calvin の肉体にまで至るところは描いていないので、この詩の実態の半分しか説明していないことになる。²³ が、しかし、この詩解明の一つの手掛りであることは間違いない。18世紀には、Pope が Donne の作品中の傑作の一つに数え、ロマン派文人達の中では、Coleridge, Charles Lamb, De Quincy 等がかなり認めていたらしい。²⁹ しかしながら、1912年に Grierson が失敗作と見なして以来、Donne の他の *Songs and Sonnets* や *Elegies* 等への高い評価の陰に隠れがちであった。最近では先にあげた Milgate の1967年版によって、問題作としてかなり見直される気運にあるようである。

ところで、この詩の詩形は、9行を iambic pentameter, 10行目を Alexandrine とする10行一連の stanzaic form をとっている。作者の構想は、〈魂〉の全歷程を描くという大掛かりなものなので、epic 形式を採用しているが、真の目的は、Renaissance epic の伝統の parody, 即ち、mock-epic 「擬似英雄叙事詩」を書くということであり、従って、この詩には、種々な点で種々なもじりが行われている。³⁰ 例えば、作者は第1連冒頭を叙事詩を語り始める常套表現 “I sing” で始め、第2連では the Sun, 第3連では Noah, 第4連では Destiny に呼びかけ、この詩において上記の三つに詩神の役割を果たさせることにしている。とすると、叙事詩の英雄に当たるのが〈魂〉ということになるが、英雄の武勇伝に比べて、結局は人間の墮落を描く〈魂〉の遍歴はまことに非英雄的である。そこで、全体の詩風も、英雄叙事詩の格調高く、朗々とした語りの調子に対し、いわゆる「低俗な文体」low style を用いた、陰気で幾分耳障りなものになっている。といっても勿論、Donneらしい conceit や paradox 等も詩全体に多く散在している。それにこの詩が植物、動物の行動を描くことによって、現実世界での人間の行動を諷刺する「寓意詩」allegory になっていることも見落せない点の一つである。

さて、少々詳しい分析に移りたい。第1連から第7連までは、作品全体への序論のようなもので、第5連では、叙事詩の decorum をもじりつつ、³¹ 同時に、Donne はやはり彼らしく、自らの identity 追求を行なっている。

To my sixe lustres almost now outwore,
 Except thy booke owe mee so many more,
 Except my legend be free from the letts
 Of steepe ambition, sleepe povertie,
 Spirit-quenching sicknesse, dull captivitie,
 Distracting businesse, and from beauties nets,
 And all that calls from this, and t'other whets,
 O let me not launch out, but let mee save
 Th'expense of braine and spirit; that my grave
 His right and due, a whole unwasted man may have.

(ll. 41-50)

このように作者は、冷静に30歳になろうとするこれまでの自分を振り返り、これからの30年が平穩に過ごせるよう祈るのである。

第6連後半の次の数行、

I launch at paradise, and saile toward home;
 The course I there began, shall here be staid,
 Sailes hoised there, stroke here, and anchors laid
 In Thames, which were at Tigrys, and Euphrates waide.

(ll. 57-60)

は、遍歴する魂が楽園から乗り出し、最後には“home” (l. 57) [英国]、
 “Thames” 川 (l. 60) へ戻ることを予告しており、第7連の“us” (l. 61) へと続く。

For this great soule which here amongst us now
 Doth dwell, and moves that hand, and tongue, and brow,
 Which, as the Moone the sea, moves us;...

(ll. 61-63)

この“this great soule”が Elizabeth 女王を指す、指さないの論争は、Gosse 以来現在まで続いているが、³² 私は、ごく率直に読めば、Elizabeth 女王を指し、上に引用した行に続く、“This soule to whom *Luther and Mahomet* were/Prison of flesh;... (ll. 66-7) には、Mahomet, Luther と共に Anglican Church を打ち建てた女王も、教会への異端者として暗示されている、と解釈したいと思う。しかし、これは、Grierson の Donne はまだ “a Catholic in the sympathies” ³³ という主張を認めると言うことではない。この詩は mock-epic なのであって、作者はそれ程、深刻に自らの宗教感情を吐露しているとは考えられないからである。

第8連から第51連までは、「存在の鎖」の位階を逆に下から上へたどって、植物から動物へ、動物から人間(の女)への〈魂〉の遍歴が、創世記というより、秘教的³⁴ な世界を舞台にかなり具体的に語られている。これらの連では、特に性的連想のある動、植物が選ばれている点、種類の異なった動物間、獣と人間との間の性関係が扱われている点、Donne には珍しい自然や動物の描写がある点、所々に警句表現がみられる点などが、私達の興味をひく。だが、全体としては、各所に盛られた人間社会への諷刺に注意を払わなければ、44連にも渡る長いものであるだけに、少々単調で冗長なのは否定できないだろう。詩の大筋は、最初 Eve と Adam が食べるリンゴに宿っていた〈魂〉(第8連)が、次にマンドレークに宿り(第16連)、次に雀の卵に宿り(第19連)、魚から白鳥に宿り(第25連)、みやこどりにさらわれ(第28連)、鯨の胎児に宿り(第33連)、次に鼠に宿り(第38連)、ついで狼の子に宿り(第42連)、この後〈魂〉は更に狼と犬との混血に宿り(第45連)、続いて猿に宿り、その猿が人間の娘、即ち Adam の五番目の娘の Shipatecia の最初の恋人となり(第46連)、次に Cain の妹であり妻でもあった Themech に宿った(第51連)、というのである。

ところが次の第52連では、作者は

Who ere thou beest that read'st this sullen Writ,
Which just so much courts thee, as thou dost it,
(ll. 511-512)

と、「このような陰鬱な詩を読むあなたは何者か」と読者を侮り、続けて、

Ther's nothing simply good, nor ill alone,
Of every quality comparison,
The onely measure is, and judge, opinion.

(ll. 518-520)

と、「この世には絶対的な善も、絶対的な悪も無い。価値というのは相対的なものでしかありえない」という思いがけない、懐疑的な言葉で、この詩を突然中断している。何故中断したのか。この点について Milgate は、この詩そのものに、その原因が内在していた、と説明し、³⁵ 現在のところは、この説が最もよく受け入れられているようである。

さて、Gosse によって主張されたこの詩と Essex 処刑との関連を Grierson は、

..... It[=This poem] reflects the mood of mind into
which Donne was thrown by the tragic fate of Essex³⁶...

と述べた。これに対し Milgate は、

..... Nor does there seem to be any special reference to the
execution of Essex six months before the poem was begun;
there is no evidence that Donne was really close to the
Earl or was much affected by his downfall.³⁷

とその関連性も含め、Donne と Essex 伯との関係を強く否定している。しかし私は、Douglas Bush も認めているように、³⁸ Essex 事件は、それへの直接的言及はないにしても、又この詩執筆の唯一の動機ではなかったにしても、動機のうちの一つではあったと考えたいと思う。何故なら、当時の Donne には前章で指摘したとおり、Essex 伯の人間の欠陥もその行動の非もわかっていたから、伯の悲劇が起こった後も、当然彼は伯の生前の行動を賞め称え、伯の死を嘆き悲しむという哀歌的姿勢はとってはいない、しかし一方で、Donne は

詩人としての活躍の時期が遅かったとはいえ、70年代をピークに大流行していたあの「エリザ崇拜」即ち女王への讚美を全くおこなっていないのである。これは Hunt も主張するように、³⁹ 極めて肝要な事実ではないか。しかも当時は、女王や女王を取り巻く側近への非難、攻撃の文書の印刷や出版は一切禁止されてもいたのである。そこで、Donne にとっても自らの不満や義憤、にがにがしい思いを表現する為に、直接的表現でない何か他の形態が必要となったのではなかったか、このように推論を押し進めると、ここで諷刺寓意詩であるこの詩が浮かび上がってくるのであり、Donne が、女王の Essex 伯取り扱いへの不満も含めて当時の社会への自らの気持を、寓意の形で暗示しているという推論もそれ程不自然でなくなる。そこで以下、次の三点をあげて、この詩と、当時の宮廷や世間に対する Donne の内面との関連を若干考察してみたい。

まず最初に取り上げたいのは、この詩においても、女性とその諷刺の対象の一つとなっているが、特に「女性が人類の墮落の原因である」と非難され、しかもその諷刺の調子が例えば次のように極めて熾烈になっている点である。

keeping some quality

Of every past shape, she knew treachery,

Rapine, deceit, and lust, and illsew

To be a woman.

(Ll, ll. 501-509)

そもそも、女性は、ローマの昔から諷刺の対象の一つとして歴史の古いものであり、⁴⁰ しかも当時は courtly love の行き過ぎや「エリザ崇拜」への反撥から、女性を蔑視、あるいは非難することが一般的風潮の一つでもあった。だが、Donne の女性へのシニシズムは時として、群を抜いている。勿論、この詩にはいろいろなレベルでの女性への諷刺がみられるが、次に引用する三行の面白さは、

Man all at once was there by woman slaine,

And one by one we're here slaine o're againe
By them.

(X, ll. 91-93)

“slaine”の pun に基づいており、私達はここでもこの詩がパロディであったことを思い出す。がしかし、pun を pun として理解しても、女性を罪深い存在とする発想は残り、これが雄狼に雌犬、雄猿に人間の女という性的な組み合わせの背後に見える Donne の当時の女性観の一面なのである。又、女王の〈女〉としての特質が Essex 伯を破滅に追いやった、という一般の見方もあったというのだから、ひょっとすると、この女性蔑視と女王の〈女〉とはなんらかの関係があったのかもしれない。が、それにしても、この詩にみられる女性諷刺は余りに辛辣なので、学者によっては、結婚問題が極めて重大な局面を迎えていたこの時期の Donne が、そのような女性観を抱いていたことを訝る向きもないではない。だが、私はこの矛盾がかえって Donne らしいと考えている。

次に取り上げたいのは、この詩でもやはり宮廷人が諷刺のもう一つの対象となっており、例えば暴君と寵臣との相剋や確執、獵官運動に明け暮れる官吏や高官等の愚行と悪徳等が次のように問題にされている点である。

Exalted she'is, but to th'exalters good,
As are by great ones, men which lowly stood.
It's rais'd, to be the Raisers instrument and food.

(XXVIII, ll. 278-280)

He hunts not fish, but as an officer
Stays in his court, as his owne net, and there
All suitors of all sorts themselves enthrall;

(XXXIII, ll. 321-323)

ところで Milgate はこの詩における王や廷臣への諷刺を “generalized and unemotional”⁴¹ としているが、この点は、Donne の中に宮廷内の一員とし

ての意識が確立してきている為と考えれば、一応納得できるのではないだろうか。‘Satire IV’におけるように、宮廷の墮落の実態を並べ上げることを楽しむ(?)心の余裕はもはや、あまり感じられない。あるのは、Wottonへの書簡の中に認めた、醒めた疎外感、あるいはある種の諦観めいた冷笑ではないだろうか。尤も、次に引用する第37連には、

Who will revenge his death? or who will call
 Those to account, that thought, and wrought his fall?
 Th'heires of slaine kings, wee are often so
 Transported with the joy of what they get,
 That they, revenge and obsequies forget,
 Nor will against such men the people goe,
 Because h'is now dead, to whom they should show
 Love in that act; Some kings by vice being growne
 So needy of subjects love, that of their own
 They thinke they lose, if love be to the dead Prince
 shown. (ll. 361-370)

主君を殺されても、葬いも復讐もしようとしないうちの後継者や復心の者たちの忘恩、裏切り等の背信行為が糾弾されており、ここには、ひょっとすると、Essex 事件直後の廷臣達の行動への非難や皮肉が暗示されている、と推測できるかもしれない。というのは、Donne には、事件の3年後の1604年かその翌年執筆されたと推定されるラテン語の *Catalogue Librorum* (*The Courtier's Library*) と題する小冊子があり、その中で彼は Essex 伯の庇護を受けた身でありながら、その恩顧に報いるどころか、Essex 裁判で不利な証言をぬけぬけと行なった Francis Bacon に対して実に^{ひど}に厳しい当擦りをしているからである。⁴²

三つ目に取り上げたいのは、Donne 自身も “this sullen Writ”(l.510) と呼んでいるように、この詩には殆ど全体的に暗い陰気なムードが漂っているという点である。さて、これは、Donne が詩中でも “this age'd evening”(l.5) とか “And thy frail light being quench'd”(l.20) 等と表現しているよう

に、当時、即ち16世紀の終りから、17世紀初頭にかけて、多くの人々が抱いた〈世界は老化し、衰弱した〉という暗い末世思想、危機意識を彼も分けもっていたことを端的に物語っている。しかも Donne は、宮廷の墮落も反逆者や異端者の出現も実はその〈世界老化〉の徴候であると考えていたらしいのである。振り返ってみれば、つまりは Essex 事件も又、当時の乱れた不安で不隠な世相を象徴するものであり、同時にその発生が時代の危機意識を一層煽るものであった。当時の人々の多くが、この事件によって、世界の終焉の近いことと、この世のものを価値判断することの難しさを、いよいよ深く実感したらしく、Donne もその例外ではありえなかった。この意味において、詩全体の論理の動きから考えると、一見唐突に見えるこの詩の結末の壊疑的な言葉も、Donne にとっては一つの実感であったと納得されよう。

7 結 論

Essex 伯の処刑の約8ヶ月後の1601年の10月から12月まで、Donne は Egerton 卿の代理として、ある選挙区から下院議員として国会に登場する。政界への第一歩であった。だが、同じ年の12月、Donne は生涯最大の危機に見舞われる。29歳の Donne と今は亡き Egerton 夫人の姪の17歳の Ann More との、彼女の父親の許可を得ないままの秘密結婚である。Ann の父親の More 卿は激怒、Donne と立会い人をしてくれた Brooke 兄弟とを Fleet 監獄に投獄、Egerton 卿にまで無理に頼み込んで、Donne を秘書職から解雇させる。以後 Donne は、この向こう見ずな結婚に災いされ、1603年に女王が70歳で崩御し、James I が王位を継承してからも、出世の手掛りを得られなのまま、延々更えんえんに10年以上も浪人生活を送ることとなった。この中年期、野心家 Donne は、多くの保護者に取り入っては、飽きもせず、世俗的栄達を懇願している。

とはいっても、これまでも述べたとおり、当時の社会構造を考えれば、この Donne の獵官運動も特に責められることではなかった。同時代人の多くが同じ様な野望を抱いていたし、彼には Egerton 卿の秘書をしたという貴重な

体験もあり、受けた教育、交友関係等も全て、宮廷での仕官の夢を否定するものではなかったからである。ただ、興味深いことにこの時期、Donne は神学についても深く研鑽を積んでおり、その学識を買われて1607年には聖職への誘いがかかる程であったという。

1615年 James I の強い要請に従って聖職についた Donne は、直ちに王室付き司祭、1616年には Lincoln 法学院の神学講師に任命され、1621年から死ぬまでの10年間は聖パウロ大寺院の首席司祭として盛名を馳せ、最晩年には Charles I の御前でしばしば説教を行なう程の昇進振りであった。

さて、このような生涯を送った Donne と Essex 伯との関係であるが、結局のところ、Essex は Donne にとって保護者でも廷臣の鑑でもなく、いわば自らの傲慢さ故に天国から追放された「墮落天使」であった。しかし、Bald が、

It may be assumed, however, that Donne was profoundly disturbed by Essex's fall.⁴³

と述べているように、Essex が Donne にとって身近な存在だったことや、又、その栄光から破滅への落差が極端に大きかったこともあり、彼のこの転落は Donne の心を深くかき乱したと思われる。勿論、この事件によってだけではない。だが、これも含めて当時の不穏な社会の動きは、Donne の危機意識を一層深刻なものにしていったのである。尤も、見方を変えれば、Essex 事件は Donne に自己と自己を取り巻く現実世界を冷静に見直す機会の一つを与え、これによって彼は、相矛盾するようだが彼にあっては併存可能な、当時の変動の社会を生き抜く強靱な神経と、後に深い宗教的境地へと進展する懐疑精神とを学び取ることになったともいえよう。だが、そのいずれであるにしても、Essex 処刑に始まったこの1601年は、Donne 自身にとっても、しばしば自殺への衝動にすら悩む内的葛藤の中年期の開始を告げる重大な年となったのである。

註

1. "Devereux, Robert", *Dictionary of National Biography*, Vol. V (London, Smith, 1908-9) p.889.
Edward Le Comte, "The Ending of *Hamlet* as a Farewell to Essex", *Poets' Riddles* (Kennikat Press, 1975) pp.10-43.
2. *Three Renaissance Classics, The Prince, Utopia, The Courtier* (Charles Scribner's Sons. 1953) p. xv.
3. Roy Strong, *The Cult of Elizabeth* (Thames and Hudson, 1977) p.79.
4. *Ibid.*, p.16.

越智武臣著『近代英国の起源』（ミネルバ書房，昭和41年）p.56.

5. 越智, *ibid.*, p.62.
6. TO PLEAD MY FAITH
WHERE FAITH
HAD NO REWARD

by Robert Devereux, Earl of Essex

To plead my faith where had no reward,
To move remorse where favor is not borne,
To heap complaints where she doth not regard-
Were fruitless, bootless, vain, and yield but scorn.

I loved her whom all the world admired,
I was refused of her that can love none;
And my vain hopes, which far too high aspired,
Is dead, and buried, and for ever gone.

Forget my name, since you have scorned my love,
And womanlike do not soo late lament;
Since for your sake I do all mischief prove,
I none accuse nor nothing do repent.

I was as fond as ever she was fair,
Yet loved I not more than I now despair.

James E. Miller 他 eds., *England in Literature, Macbeth Edition*, (Scott Foresman and Company, 1976) p.131 より引用

7. Strong, *op. cit.*, p.81.
8. *Ibid.*, p.80.

9. 越智, *op. cit.*, p.72.
10. "Devereux, Robert", (DNB) p.879.
11. R. E: Bennett, "John Donne and the Earl of Essex". *Modern Language Quarterly*, 1942, pp.603-604.
12. Helen Gardner, ed., *John Donne: The Elegies and the Songs and Sonnets* (Oxford, 1965) p.25.
13. W. Milgate, ed., *John Donne: The Satires, Epigrams and Verse Letters* (Oxford, 1967) p.xxxiv.
14. *Ibid.*, p.56.
以下、書簡詩の引用はこの版からとする。
15. *Ibid.*, pp.xxxiii-xxxv.
16. Essex 伯に伴われて参内したと推測する学者もいるが、根拠が不十分である。
17. Milgate, *op. cit.*, pp.149-9.
18. Joel Hurstfield and other, *Elizabethan People, State and Society*, (Edward Arnold, 1972) p.23.
19. Milgate, *op. cit.*, p.15.
以下 'Satire IV' の引用はこの版からとする。
20. *Ibid.*, p.xxi.
21. *Loc. cit.*, p.xxi.
22. 越智, *op. cit.*, p.61.
23. R. C. Bald, *John Donne: A Life* (Oxford, 1970) p.107.
24. E. M. Simpsom, *A Study of the Prose Works of John Donne* (Oxford, 1924) p.310. 以下書簡の引用は、この版からとする。
25. "Devereux, Robert", (DNB) p.888.
26. Milgate, *op. cit.*, p.26.
以下 'The Progresse of the Soule' の引用はこの版からとする。
27. Edmund Gosse, *The Life and Letters of John Donne*, (Peter Smith, 1959) Vol. I. pp.132-133.
28. Milgate, *op. cit.*, p.xxvi.
29. *Ibid.*, p.172.
30. *Ibid.*, pp.xxvi-xxvii.
31. *Ibid.*, p.xxvii.
32. Gosse, *op. cit.*, p.133.
33. H. J. C. Grierson, *John Donne: Poems* (Oxford. U. P., 1912) Vol. 2, p.219.

34. Milgate, *op. cit.*, p. xxx.
35. *Ibid.*, pp. xxvii-xxviii.
36. Grierson, *loc. cit.*
37. Milgate, *op. cit.*, p. xxxii.
38. Douglas Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century, 1600-1660*, (Oxford, 1962) p. 134.
39. Clay Hunt, *Donne's Poetry* (Yale, 1954) pp. 166-7.
40. 青木巖『イギリスの詩——西洋古典詩との比較論』(荒竹出版 昭和45年) pp. 251-2.
41. Milgate, *op. cit.*, p. xxxii.
42. Simpson, *op. cit.*, pp. 151-2.
43. Bald, *op. cit.*, p. 113.

参 考 文 献

1. Biography

Bald, R. C., *John Donne: A Life*, Oxford U. P., 1970.

Gosse, Edmund, *The Life and Letters of John Donne*, Peter Smith, 1959.

Neale, J. E., 大野真弓他訳『エリザベス女王』2巻, みすず書房, 1975年。

Strachy, Lytton, 片岡鉄兵訳『エリザベス女王とエセックス』凡書房, 昭和33年。

Dictionary of National Biography [DNB] London, Smith, 1908-1909. 22 vols.

2. Editions of Donne's work

Complete Poetry and Selected Prose, ed. John Hayward, Nonesuch Library, 1955.

Elegies and Songs and Sonnets, ed. Helen Gardner, Oxford U. P., 1965.

Poems, ed. H. J. C. Grierson, Oxford U. P., 1912.

Satires, Epigrams and Verse Letters, ed. W. Milgate, Oxford U. P., 1967.

3. Critical Studies

青木巖『イギリスの詩——西洋古典との比較論』荒竹出版, 昭和45年。

Bush, Douglas, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century, 1600-1660*.

- Comte, Edward Le, *Poets' Riddles — Essays in Seventeenth Century Explication*, Kennikat Press, 1975.
- Hunt, Clay, *Donne's Poetry*, Yale U.P., 1954.
- Hurstfield, Joel and other, *Elizabethan People, State and Society*, Edward Arnold, 1972.
- 越智武臣『近代英国の起源』ミネルバ書房, 1966年。
- Parker, Derek, *John Donne and his World*, Thames and Hudson, 1977.
- Simpson, E. M., *A Study of the Prose Works of John Donne*, Oxford U.P., 1924, rev, 1948.
- Strong, Roy, *The Cult of Elizabeth, Elizabethan Portraiture and Pageantry*, Thames and Hudson, 1977.
- Williamson, G., "Donne's Satirical *Progresse of the Soule*", *A Journal of English Literary History*, vol. 36, No. 1, 1969, pp.250-264.
- Winny, James, *A Preface to Donne*, Longman, 1970.